一歩踏み出したそのところから、何かが始まる

松原 葉子

(リードオルガン奏者／公認 OriHime パイロット／
障害平等研修フォーラム 認定 (A) ファシリテーター)

後期第1回目のご講義、《愛の讃歌》から始まり、過分なご紹介までいただき感謝のほか
ございません。

ゆきさんの公開講座を通して与えられました出会いから、ついには OriHime で美唄に伺
い、福場先生にインタビュー取材をさせていただくことが叶ったのですから、あとからあと
から驚くばかりです。さらに、福場先生と瀬戸山先生、お二人のご結婚も、私どもの想いを
遙かに超えた、なんと素晴らしいストーリーなのでしょう！

一歩踏み出したそのところから、何かが始まる。その喜びを、しみじみと噛みしめており
ます。

今回のご講義では、あらためて2つのことに気づかされました。一つは、ゆきさんの講座
受講をやめられないのは、このシリーズにすっかり恋をしてしまっているから！というこ
と。もう一つは、わたし自身もまた、ずっと言葉を探し続けながら人生の旅をしているとい
うこと。そしてどちらも、ある種の「切実さ」に押し出されてきたゆえだということを見
つけたのです。

切実さ、ということについては、先日視聴いたしました日本医学ジャーナリスト協会主催
「医療ジャーナリスト基礎講座」において、白石正明さんがおっしゃっていたことでもあり
ます。単に教養としてとか学びの範疇ではなく、わたしにとっては、常に生存と生活そのも
のの切実さがかかっているからなのではないか、と。何か腑に落ちるところがありました。

ゆきさんがおっしゃいました「その世界にどっぷり入ってしまうと、本質的なものが見え
なくなってしまう」ということは、長期入院生活のなかで日々、痛感させられています。職
員のみならず、私たち患者もまた然り。一歩、病院の外に出れば「おかしい」と言われるこ
とが、病院の管理下に置かれていると「おかしい」とキャッチする感覚が鈍ってしまうので
す。言葉の使い方もまさしくそう。「それ、あなたのどこから出ている言葉ですか？」と、
医療者に問いたくなるシチュエーションも多くあります。

言葉が通じない…。認識のズレ、ギャップを、言葉によってどう埋めていくのか。病院の
なかに居るわたしにとっては、永遠のテーマのようにも思います。つまり、人権意識をどの
ようにして培い、成熟した真の共生社会を創っていくことができるのか、と。

つい先日も朝日新聞において、作家の市川沙央さんによる「共生」という言葉をめぐる思
考の不徹底を問う厳しい投げかけが掲載されていました。業界用語と言っていいような、容
易に使ってしまう言葉たちのなんと多いことでしょう。でも、果たしてどこまでその意味を
咀嚼しているのか、わたし自身も問われたことでした。

本質を見極め、数々の「言葉」をつくり出し、あるいは退治していらしたゆきさんのお働
きにただただ感服いたしております。最後、質問ができなかったのですが、「健常者」とい
う言葉に代わる言葉は…？ よいアイデアがありましたら(考えつつあるものでも)そっと
教えていただきたいな！と思いました。

いつの日か、そのような議論もできればうれしく思います。